

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：33605

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K13282

研究課題名(和文)社会的状況における被服の効果の検討：自己認知の調整過程に注目して

研究課題名(英文)Effects of clothing in the social contexts: The moderation processes of self-cognition.

研究代表者

石井 国雄(Ishii, Kunio)

清泉女学院大学・人間学部・准教授

研究者番号：40705208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ジェンダーおよび着衣認知という観点から、社会的行動が社会的状況に対応させて変容する過程を検討することを目的とした。とくに研究においては、自撮りという自己を撮影する行動の特徴をとらえることに注目し、自分がうまく映るように写像を調整する過程と、その傾向が印象管理目標によって影響されて変化すると考えた。一連の研究から、男女の社会的行動が被服の特徴や置かれた状況によっても影響を受けて変容することを示唆する結果を得た。その一方で、社会的状況が対比効果をもたらす過程については効果を示す十分なデータが得られず、今後のさらなる検討が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人の社会的行動は自分の衣服や状況に伴って変容するが、本研究はその影響を実証的に検討したものである。被服は不可欠な社会的行動であるが、本研究の成果により、被服の在り方によってわれわれの社会的行動が様々な形で影響を受けて変化することが示唆された。とくに本研究は、ピンク色の衣服が女性的な行動を生起させるかを取り上げた。「ピンク色は女の子の色」は社会的に作られたステレオタイプであることが近年注目されている。本研究の知見はそうした社会的に作られたステレオタイプが被服を通して顕現化することで、非意識的に女性的行動を引き出してしまうことを通して、ステレオタイプの再生産を引き出す可能性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of present study was to examine the process by which social behaviors are transformed in response to social situations from the perspective of gender and clothed cognition. In particular, present study focused on capturing the characteristics of the selfie-taking behavior: the process of adjusting the selfie-image so that the self is well photographed, and the change as a reaction to the impression management goal. A series of studies suggested that the social behavior of men and women is influenced and transformed by the characteristics of their clothing and the situation. However, there is not enough data to show the effect of social circumstances on the process of contrast effects, and further study is needed.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会的認知 自撮り ジェンダー ピンク 着衣認知 ジェンダー・ステレオタイプ ステレオタイプ 印象管

## 1. 研究開始当初の背景

被服は自己表現の重要な方法である。衣服を着用することで、自分がどのような人物であるかを他者に伝達することができる。また、スーツを着ることで社会人としての自分を意識するように、自分自身に対しても、社会的役割を持つ存在としての自己認知をもたらす。

本研究は社会的認知の立場から、被服が自己認知や行動に及ぼす影響を検討する。着衣認知理論によると、衣服を着る行為は、衣服の持つ象徴的意味を活性化させることにより、着用者の心理過程に影響を及ぼす。たとえば、Adam & Galinsky (2012) は、医療用白衣を着た場合には視覚探索課題における注意力が増加することを示した。この変化は、白衣に込められた「科学・医学の専門家」という含意が、着用によって活性化したためと考えられる。

申請者は着衣認知研究の知見をもとに、現代社会においてジェンダーを表象する色とされるピンクと青を取り上げ、被服における色の違いが「女性らしさ」、「男性らしさ」に一致した判断や行動を生じさせるかを検討してきた(若手研究(B)15K17255)。一連の研究から、ピンクの被服は女性的、青の被服は男性的な自己認知を伴い(Ishi, Numazaki, & Tado'oka, 2019)、ジェンダーに関する社会的判断を変容させることを示した(Ishii, Kato, Tado'oka, & Matsuzaki, 2017)。すなわち、衣服の着用は、衣服のもつ象徴的意味の方向に自己認知を変容させることを通して、判断や行動に影響を与える可能性が見出された。

着衣認知理論はこれまで、衣服のもつ象徴的意味に一致した判断や行動が導かれること、すなわち「同化」を想定してきた。しかし、男性においてはピンクの被服が逆に男性的な自己概念を強めさせる結果を得ており(Ishi et al., 2019)、衣服のもつ象徴的意味とは逆の方向に判断や行動が変容すること、すなわち「対比」が示された。こうした結果から、被服がもたらす影響は一樣ではないことが示唆され、どのような場合に被服が同化を導くのか、あるいは、対比を導くのかを明らかにすることは重要な問いとなっている。

## 2. 研究の目的

本研究はこれらの研究の流れを受け、着衣認知における同化と対比効果の境界条件と、状況の中で自己認知が調整されていく過程を検討した。とくに、被服は自己表現の重要な手段であり、他者とのかかわりの中で重要な意味を持つことから、本研究では社会的状況の中で自己認知が調整される過程に注目した。

被服は、A) 衣服のもつ象徴的意味と一致する概念を活性化させ、B) 当初、概念活性は衣服のもつ象徴的意味と一致する自己認知を活性化させる(同化)。次に、社会的状況が意識される場面であれば、C) 社会的状況との適合・不適合を判断する過程が生じる。D) 状況と適合すれば自己認知はさらに強化(同化)されるが、状況と不適合であれば被服が持つ意味と逆向きの自己認知が生じるだろう(たとえば、パーティ会場においてパーティドレスを着用する場合は状況に「適合」していると判断されるが、日常の生活空間で身に付ける場合は違和感を生じ「不適合」であるとの認知が生じる)。こうした循環を経て、E) 自己認知と対応した社会的行動・判断が生じる。一方で、もし状況が意識されなければ、E) 衣服のもつ象徴的意味と一致した同化的な行動・判断が生じる。

本研究では、被服に伴って生じた自己認知が、状況との調整過程を経て、行動・判断に至る過程を捉えるための実証実験を行った。

## 3. 研究の方法

文献研究をおこなった後、主に実験を用いて実証的な検討をおこなった。具体的手続きは、研究成果とあわせて記述する。

なお、当初計画の目的であった、被服が社会的行動に及ぼす影響に関する検討を行う中で、被服に付されている色(ピンク・青)が持つ印象についても検討する必要性が生じたため、その実験結果も報告する。

## 4. 研究成果

### (1) ピンクと青に関する潜在的ジェンダー・ステレオタイプの検討

本研究課題においては、衣服のジェンダー性としてピンクと青という色が、人々のジェンダー的な行動を惹起していくことを検討していくが、研究履行にあたり、ピンクと青に対して人々がジェンダー・ステレオタイプをどのように結び付けているかを確認することが必要と考えた。すなわち、ピンクと女性、青と男性という結びつきは、記憶表象として保持されているのかを検討した。同様に、ピンクと青が、女性性(例:従順さ、あたたかさ)・男性性(例:支配、有能さ)といったジェンダー・ステレオタイプと結びついているのかを検討した。

### 方法

**実験参加者** 大学生 85 名(男性 14 名、女性 60 名、不明 11 名)が実験に参加した。

**手続き** 参加者は以下の 3 種類の IAT に取り組んだ。

- 1) 女性-従順さ IAT: カテゴリは“女性-男性”、“従順さ-支配”とした。

2) ピンク-女性 IAT: カテゴリは“ピンク-青”, “女性-男性”とした。色刺激としてピンクと青の長方形を提示した。なお, ピンクと青には RGB 値を変化させた 5 パタンの色をそれぞれ用意した。

3) ピンク-従順さ IAT: カテゴリは“ピンク-青”, “従順さ-支配”であった。

### 結果

1) 女性と従順さ, 2) ピンクと女性, 3) ピンクと従順さの結びつきを示す D 値を算出した。各 D 値の効果の大きさ確認するため, それぞれの平均値に対して基準値を 0 とした 1 サンプルの *t* 検定を行ったところ, いずれも有意となった (女性-従順さ:  $M=0.55$ ,  $CI=[0.49, 0.62]$ , ピンク-女性:  $M=0.63$ ,  $CI=[0.57, 0.69]$ , ピンク-従順さ:  $M=0.21$ ,  $CI=[0.14, 0.27]$ )。効果量はそれぞれ  $r_s=.89, .91, .55$  であり, いずれも比較的大きかった。このことから, ピンクと女性, 青と男性だけではなく, ピンクと従順さ, 青と支配という潜在的ジェンダー・ステレオタイプが存在が示された。なお, 各 D 値について相関分析を行ったところ, 女性-従順さとピンク-従順さに弱い相関がみられ, 男女概念とピンク・青というジェンダー色にオーバーラップがあることが示唆された。

## (2) 自撮りと自己呈示目標との関連についての検討

Makhanova, McNulty, & Maner (2017)は, 自撮りをする角度に性差があることを示した。女性は文化的に価値の高い若々しさ強調して魅力的に見せるために上から自分を撮影し, 男性は自分を高い位置に見せて身体の大きさを強調し, 支配的な印象を与えるため下から自分を撮影する。すなわち, 自撮りは現代的なジェンダー関連行動と考えられる。

そこで, 自分をカメラで撮影すること (自撮り) を取り上げ, 自撮り中の映像データから調整過程を解析した。仮説として, 女性においては上から自分を撮影する傾向がみられることを想定した。また, この傾向はピンクの衣服を着て女性的な自己が活性化している場合, 女性的な行動である上からの自撮りをすると考えられる。とくに自撮りは自分の姿を見て, 調整し, 徐々に定め, 撮影する過程が含まれる。この一連の過程を捉えることで, 状況と自己のアクティブな相互作用を示すことができると考えた。

本研究では, 2-1) 大学生の自撮りの特徴と関連変数を把握するための予備的検討, 2-2) ピンクの被服が女性の自撮りに及ぼす影響, 2-3) 印象管理目標が男性の自撮りに及ぼす影響についての研究を行った。

### 2-1 女子大学生の自撮りの特徴についての予備的検討

後続の研究に先立ち, 女子短期大学生を対象に, 自撮りにはどのような特徴がみられているか, どのようなことに注意して自撮りをしているかについて検討を行った。仮説として, 上から自分を撮影していること, また, 肯定的な印象になるようにしているほど上から自分を撮影していることを想定した。

#### 方法

**実験参加者** 長野県の短期大学生 83 名が実験に参加した (女性 79 名, 男性 4 名)。男性は人数がわずかであったため分析から除外した。また, 実験者の指示を無視した形で自撮りを行った 4 名も分析から除外した。

**手続き** 実験参加者にカメラ付きタブレット端末 (iPod) を用いて, 自撮りを行ってもらった。自撮りは立った状態で 2 回ずつ行ってもらった。自撮りの様子はビデオカメラで撮影した。さらに撮影後に, どのような印象になるように撮影したか (印象管理目標), どのようなことに注意して自撮りをしていたかについて回答してもらった。

#### 結果

得られたビデオデータから自撮り時のスクリーンショットをとり, 対象の目を分度器の中心として水平線とタブレット端末のカメラ位置までの角度を記録した。2 回の撮影の角度を平均化し従属変数とした。全体の平均値をみたところ, 自撮りの角度の平均は  $6.15^\circ$  ( $95\% CI: [3.84, 8.46]$ ) で, 女性参加者は上向きに自分を撮っていることがわかった。また, 分布は  $-3.62 \sim 0.00$  と  $10.88 \sim 14.50$  をピークとした二山分布であった (Figure 2)。

撮影の際に意識されていた点については, 「顔が上向きにうつるようにした」が 2.8 点 (4 件法) であり, 理論的中央値の 2.5 よりも有意に高かった。そのほかに意識されていた点は「口角を上げた」(2.81 点) のみであった。

自撮りの角度と印象管理目標について相関分析を行ったところ, 「洗練された-素朴な」という項目において有意な弱い相関がみられ, 洗練された印象になろうとするほど上から撮影しているという傾向がみられた。

### 2-2 ピンクの被服が女性の自撮りに及ぼす影響

ピンクは女性的なステレオタイプと関連付けられているが, ピンク色の衣服の着用は, 着用者

の女性的な自己認知を高め、女性的な行動をとらせる効果があることが示されている。そこで、ピンクの衣服を着ている場合に自撮りをした場合に、女性の典型的な自撮りの特徴である上から自分を撮影する行動がより強く見られるかを検討した。

## 方法

**実験参加者** 東京都の女子大学生 50 名が実験に参加した。

**手続き** 参加者にピンクまたは青の衣服を着用してもらった後、カメラ付きタブレット端末を用いて、自撮りを行ってもらった。自撮りは座った状態と立った状態それぞれ 4 回ずつであった。また 3 回目に角度計を用いてタブレットの角度を測定した。さらに、自撮りの様子はビデオカメラで撮影した。また、参加者には、事前に自己認知について、共同性と作動性を回答してもらった。

## 結果

自撮りの角度の平均は  $3^\circ$  (95% CI: 座った状態 [-0.44, 6.92]、立った状態 [0.20, 7.30]) で、女性参加者はやや上から自分を撮っていた。また、分布は正規分布に近い山型分布であった。

自撮りの角度は、潜在的自己-暖かさ、顕在的共同性によって予測された。特に、顕在的な肯定的共同性が高いほど、自撮りの角度が大きくなっていった。

さらに、色×自尊心の交互作用が有意であり、顕在的自尊心の低い女性参加者では、ピンク色のエプロンを着用したときの方が、黒色のエプロンを着用したときよりも、上方向から自分を撮影していた (Figure 4)。

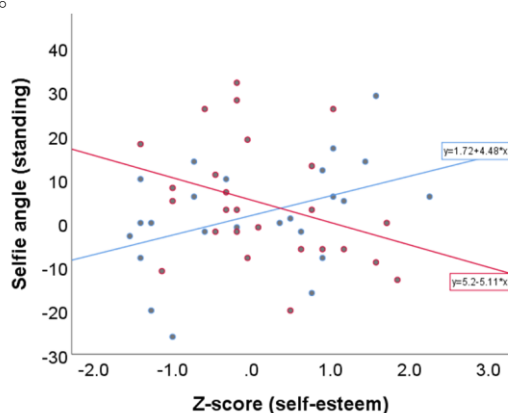


Figure 4. Scatter plot between selfie angle (standing) and self-esteem by color condition

### 2-3 印象管理目標が男性の自撮りに及ぼす影響

**目的** Makhanova et al. (2017)は、男性が体を大きく、強く、支配的に見せるために下から自撮りをするとしている。このように男性の自撮りが自己の印象管理目標を反映しているならば、印象管理目標が強まる状況においては、男性はより下の方向から自撮りをするのが考えられる。そこで、女性から見られている状況 (vs.男性から見られている状況)、撮影した写真が他者から見られる (SNS に写真をアップする) と意識させる状況を設定して、男性の自撮りがどのように変わるかを調べた。

## 方法

**実験参加者** 群馬県の男子大学生 21 名のデータを分析対象とした。

**手続き** 実験 2 と同様に、参加者にカメラ付きタブレット端末を用いて、自撮りを行ってもらった。実験者は男性の場合と女性の場合に分かれていた。自撮りは 2 つのセッションに分かれていた。第 1 セッションでは、写真の使用用途についての教示を与えずに撮影してもらった。第 2 セッションでは、SNS 上にアップする写真を撮影することを想定しながら撮影してもらった。撮影の際には角度計を用いてタブレットの角度を測定した。

## 結果

自撮りの角度の平均は  $-2^\circ$  で (95% CI: [-7.67, 3.54])、男性参加者はほぼ水平から自分を撮っていた。

角度に対して、実験者 (男性 vs.女性) × 用途 (通常 vs.SNS) の ANOVA を行ったところ、実験者の主効果に傾向差がみられ、実験者が男性 ( $M=2.77$ ) であった場合よりも女性 ( $M=-6.90$ ) であった場合のほうが下から撮影されていることが示唆された。用途に関する効果および交互作用は示されなかった。

### (3) ピンクの衣服が自己認知と摂食行動に及ぼす影響

石井・田戸岡 (2018) ではピンクの衣服を着た公的自己意識の高い女性において、女性的な潜在的自己認知が高まる一方で、摂食量が増えるという結果を得ている。先行研究では女性が好むと考えられるお菓子を食品としたことが影響したと考えられたため、お菓子の種類を変更して

再検討した。仮説として、公的自己意識が高い女性において、ピンクの着用をした場合に摂食がより少なくなることを想定した。

## 方法

**実験参加者** 長野県の女子大学生 27 名が実験に参加した。参加者には事前に公的自己意識尺度に回答してもらっていた。

**手続き** 『衣類の着心地に関する研究』と『単語への反応傾向についての研究』とのカバーストーリーの下、個別で実験を行った。服の着心地について感想を尋ねるという名目で、参加者にピンクまたは白の白衣を着用してもらった。

**自己ステレオタイプ IAT** PC 上で IAT を行った。カテゴリは、“自己-他者”，“男らしさ-女らしさ”を用いた。

**休憩** 衣服の着心地が時間を置いたときにどのようになるかを調べるためとして、休憩場所にて待機してもらった。雑誌とお菓子（ミニプレッツェル）と水を置き、自由に見たり、食べたり、飲んだりしてよいとした。10 分間にどの程度食べるかが測定された。摂食前後のお菓子と水のグラム数を計測し、前後の差をとった。

## 結果

**試食課題** 有意な効果は見られなかった。

**摂食量** 摂食前後の重量差を従属変数とし、色、公的自己意識および交互作用項を投入した一般線型モデルの分析を行った。その結果、条件×公的自己意識が有意となった。公的自己意識が低い場合には、ピンク条件のほうが白条件より摂食量が多い一方で、高い場合には、ピンク条件のほうが白条件より少なかった（Figure 3）。

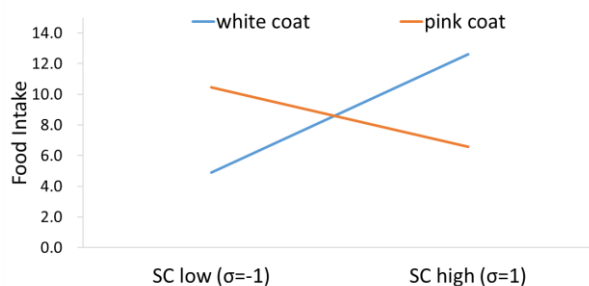


Figure 3. Food intake as a function of color and public self-consciousness.

## まとめ

本研究は、ジェンダーおよび被服認知という観点から、社会的行動が社会的状況に対応させて変容する過程を検討することを目的とした。とくに研究においては、自撮りという自己を撮影する行動の特徴をとらえることに注目し、自分がうまく映るように写像を調整する過程と、その傾向が印象管理目標によって影響されて変化すると考えた。一連の研究から、男女の社会的行動が被服の特徴や置かれた状況によっても影響を受けて変容することを示唆する結果を得た。その一方で、社会的状況が対比効果をもたらす過程については効果を示す十分なデータが得られず、今後のさらなる検討が必要である。

また、研究期間中において新型コロナウイルスの流行が重なってしまったことで実験室実験が実施できなくなり、当初予定していた「ピンクの被服が男性の力強さに及ぼす影響」を断念せざるをえなかった。今後の検討課題としたい。

## 引用文献

- Adam, H., & Galinsky, A. D. (2012). Enclothed cognition. *Journal of Experimental Social Psychology*, 117, 249–260.
- Ishii, K., Kato, J., Tado'oka, Y., & Matsuzaki, K. (2017). The effect of gender identity salience on male nurse's self-perception and work motivation. A poster presented at International Convention of Psychological Science (Vienna) VI-090.
- Ishii, K., Numazaki, M., & Tado'oka, Y. (2019). The effect of pink/blue clothing on implicit and explicit gender-related self-cognition and attitudes among men. *Japanese Psychological Research*, 61, 123-132.
- 石井国雄・田戸岡好香 (2018). ピンクの衣服が自己認知と摂食行動に及ぼす影響 日本心理学会第 82 回大会発表論文集, 2AM-022.
- Makhanova, A, McNulty, J. K., Maner, J. K. (2017). Relative physical position as an impression management strategy: sex differences in its use and implications. *Psychological Science*, 28, 567–77.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 石井 国雄・田戸岡 好香・松崎 圭佑	4. 巻 18
2. 論文標題 集団状況におけるピンクの着衣が自己認知に及ぼす影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 清泉女学院大学人間学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 29 - 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井 国雄・田戸岡 好香	4. 巻 17
2. 論文標題 ナース服の色が女性看護師に対する印象に及ぼす影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 清泉女学院大学人間学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 埴田 健司・石井 国雄	4. 巻 14
2. 論文標題 ピンク・青の衣服がジェンダーに関連する自己認知と他者認知に及ぼす効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京未来大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 141-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24603/tfu.14.0_141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井国雄	4. 巻 1
2. 論文標題 青色とピンク：色の持つジェンダー性がキャリア意識にまで影響を及ぼす？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アカデミスト	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井国雄・田戸岡好香	4. 巻 17
2. 論文標題 ナース服の色が女性看護師に対する印象に及ぼす影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 清泉女学院大学人間学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ishii Kunio, Numazaki Makoto, Tado'oka Yoshika	4. 巻 61
2. 論文標題 The Effect of Pink/Blue Clothing on Implicit and Explicit Gender Related Self Cognition and Attitudes Among Men	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 123 ~ 132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12241	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 石井国雄・田戸岡好香
2. 発表標題 ナース服の色が女性看護師に対する印象に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井国雄
2. 発表標題 企業組織におけるジェンダー・アンコンシャス・バイアスへの取組みについて考える
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井国雄
2. 発表標題 ピンクの衣服が女性のジェンダーに関する自己認知と行動に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井国雄・田戸岡好香
2. 発表標題 ピンクの衣服が自己認知と摂食行動に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井国雄・田戸岡好香
2. 発表標題 赤の服装が女性に対する性的魅力と意図の推測に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kunio ISHII, Yoshika TADO ' OKA
2. 発表標題 The role of self-image aspects on selfies angles of women
3. 学会等名 2019 SPSP Annual Convention (Portland, Oregon) (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 石井国雄・田戸岡好香
2. 発表標題 ピンクと青に関する潜在的ジェンダー・ステレオタイプの検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田戸岡 好香  (Tado'oka Yoshiika)  (10794018)	高崎経済大学・地域政策学部・准教授    (22301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------